

## 「サウロ、エルサレムに行く」

2016年05月04日

使徒言行録9章26節～31節。サウロはエルサレムに着き、弟子の仲間に加わろうとしたが、皆は彼を弟子だとは信じないで恐れた。しかしバルナバは、サウロを連れて使徒たちのところへ案内し、サウロが旅の途中で主に出会い、主に語りかけられ、ダマスコでイエスの名によって大胆に宣教した次第を説明した。それで、サウロはエルサレムで使徒たちと自由に行き来し、主の名によって恐れずに教えるようになった。また、ギリシア語を話すユダヤ人と語り、議論もしたが、彼らはサウロを殺そうとねらっていた。それを知った兄弟たちは、サウロを連れてカイサリアに下り、そこからタルソスへ出発させた。

こうして、教会はユダヤ、ガリラヤ、サマリアの全地方で平和を保ち、主を畏れ、聖霊の慰めを受け、基礎が固まって発展し、信者の数が増えていった。

サウロはエルサレムに行った。その目的を「仲間に加わろうとした」ためであると書いている。彼は教会の信徒たちを迫害するために祭司長たちから許可書をもっていたが、福音を伝道するために使徒たちからは許可書をもらうことなく、主体的に伝道を始めた。3年後、ケファ（ペトロ）と知り合いになろうとしてエルサレムに行った。その時は、ペトロと主イエスの弟ヤコブ以外には、他の使徒たちとは会わなかったと書いている。サウロのエルサレム行きは、使徒たちから伝道者としてのお墨付きをもらうためではなく、同信の仲間であることを確認したかったからである。至極当然なことである。しかしサウロは、信徒たちを迫害していたから、使徒たちは弟子として信じることができず、恐れた。その時、バルナバが仲介した。彼は使徒たちの所へ案内し、サウロが復活の主イエスに出会い、語りかけられ、回心し、ダマスコで大胆に福音を宣べ伝えたことを説明した。この執り成しによって、サウロは使徒たちの仲間として自由に行き来し、主の名によって恐れることなく語れるようになった。また、サウロを故郷タルソスに訪ね、アンテオキア教会に連れ出し、信仰の訓練を受けるようにしたのもバルナバである。

サウロに大きな影響を与えた人は三人いる。一人は、石打ちの刑を受けて息を引き取る時、「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」と祈ったステファノである。彼の祈りはサウロの心に深く残っていただろう。二人目は、復活の主イエスに出会い、目が見えなくなっていた時、訪ねて来て「聖霊で満たされるように」と按手してくれたアナニアである。彼によって、サウロの目からうろこのようなものが落ちた。三人目はバルナバである。サウロはバルナバに執り成され、またアンテオキア教会に連れ出され、この教会からバルナバに誘われて、伝道旅行に出発している。人は出会いによって思わぬ人生が開かれていく。人生における一つひとつの出会いを大切にしたいものだと思うされる。

サウロはギリシア語を話すユダヤ人に語りかけたが、彼らはサウロを殺そうと狙った。危険を察知した教会員たちは、彼を連れて地中海沿岸のカイサリアに下り、そこから故郷タルソスに送り出した。サウロは迫害を逃れて、逃亡することがしばしばである。

迫害の中、教会はユダヤ、ガリラヤ、サマリアの各地に福音宣教を広げていった。教会は初めに、ユダヤ教徒からの迫害を受けた。しかし使徒たち、信徒たちは臆することなく、福音を宣べ伝え、信者は増え、教会の基礎は固まっていった。迫害によって散らされたことが宣教の地を広げていった訳である。神の救済は、今も世界に向かって広がっている。その歴史の中に、私たちも置かれているという光栄に与っている。